

黒木西

黒木西小

学校だより

文書:校長 齋藤英義

令和4年7月13日(水)

NO.31



生産的連帯とキラキラの木

例年になく早い梅雨明けで、夏の到来も早くなったような日ざしが続いており、学校でも熱中症対策に苦慮しているところ中です。

さて、夏休みまで一週間あまり。「この夏休みにチャレンジしてほしいこと」については、月初めの全校朝会で話をしました。その内容については、後日お伝えしたいと考えておりますが、先日、夏休みと家族の関係についてということで、小学校教諭から北海道教育大学教授となられた野口芳宏氏の興味ある講演を聞きましたので、夏休み中の子どもとの関係、あるいは今現在の子どもの関係を見直す機会になればと思います。



今の家庭の中の子どもというのは、家族と、どうやって結ばれているでしょうか。だいたい、子どもに家族のことを話させると、特に連休とか夏休みということになると、「どこどこに連れて行ってくれる。」「家族で食事に行く。」「というの子どもにとっては、一番の楽しみのようなものです。確かに、それも大切なことではあります。



しかし野口さんは、「少し堅苦しい言い方で悪いんですけど」と前置きされ、そういうつながり方を「消費的連帯」と表現されました。

消費的連帯とは、必ずそこに「消費」がともなう。消費をたくさんしてもらったことによって、愛を感じる場合のことだそうです。例えば、いっぱいごちそうをしてくれた。好きなところへ連れて行ってくれた。おいしい料理のあるホテルで一泊した。全部お金がかかる。まさしく、消費的連帯です。そして、この消費的連帯は、「金の切れ目が縁の切れ目」であると表現されていました。

都合が悪くなると、連れていってもらえなくなります。そうすると、そういう消費的連帯の中で育ってきた子どもというのは、「ケチ」とか、「ウソつき」となる。これは消費的連帯と言われているが、「連帯」でも何でもない、消費的同居とでもいったらいい言葉ですと話されていました。

野口先生は、「本当に人間と人間が心を結ばせる連帯というのは、必ずそこに生産性がなくつちやいけないと考えています。」と言われ、それを「生産的連帯」と言っていました。生産的連帯というのは、子どもと親とがお互いに感謝し合いつつ結ばれるという場合だそうです。



例えば、明日お父さんが出張で遠くへ行くというとき、「よしボクが靴を磨いてやろう」と思う。で、靴をこつそりとピカピカに磨いて、お父さんがほこりっぽい靴かなと思っていたらピカピカに磨いてある。「誰が磨いた?」○○か。ああ、ありがとう。」



ある時、お父さんが遅く帰ってくる。「お父さん、お風呂沸かしてあるからどうぞ。」
「お、誰が沸かしてくれた?」
「私が沸かしました。」
「おお、△△が沸かしてくれたのか、ありがとう。」
と、こういうふうな家族のためを思って子どもがあることをする。されたことに對して親が感謝する。こういうのを先生は、「生産的連帯」と呼んであるわけです。

生産的連帯には金が一銭もかかりません。ちよつとその気になればいつでも早速やれるものです。風呂を沸かしておく。お母さんがつかれた体で食器の片づけをしているので、ちよつと手助けをする。そうすると、子どもが親にとってなくてはならないものになってくる。
「お前のおかげで家が明るくなる。」
「あんたのおかげでお母さんが助かる。」
子どもに對して親が感謝するようになる。(後略)

みなさん方のご家庭では、「消費的連帯」の面が強いですか、それとも「生産的連帯」の面がつよいですか?
この夏休み、「生産的連帯」での楽しい思い出を、たくさんつくってほしいと思います。

キラキラの木

学校では今、友達のいいところを見つけ、それを紹介し合おうという取り組みを行っております。昇降口のところに「キラキラの木」というものがあり、見つけた友達のいいところを貼っていきます。



その中からいくつか紹介します。「よく、○○さんが黒板消しの仕事をしている時に手伝ったりして、友達を支えていて、いいなと思いました。」(6年)

「4年生になって初めての水泳の時、私(水が苦手)で泣いている時、ながさめてくれたから、プールに入ることができました。」(4年)

キラキラと輝く友達のいいところをたくさん見つけ、感謝することで、生産的連帯がより強くなってほしいと思います。

